



J・A・C

(第 1 号)

6月24日千葉支部発足



6月24日に千葉支部が発足してから5ヶ月が経過しました。あらためて、支部に入会いただいた104名の会員各位に御礼申しあげます。

設立にあたり、“より楽しいより豊かなJACクラブライフを目指し、新しい出会いの場をつくる”ことを支部の理念とし、また“千葉という地域性を尊重し、同じ止まり木のなかで山を語り山を歩き、支部会員すべてが参画できる小集団としての特質を生かした支部づくり”を目標として掲げました。

千葉には高さで誇りうる山こそありませんが、豊かな生物多様性と文化をはぐくむ里山があり、全国に先駆け、「里山条例」

が制定されています。そこで、具体的な支部活動としては、先ず千葉の里山に目を向け、里山に登り、その良さを再発見したいと考えます。そして登るだけでなく、里山の良さを護り次世代に伝える活動にも取り組んでみたいと思います。もちろん、JACは“登山の団体”として、先蹤者が世界の高峰を目指しパイオニアとしての役割を果たしてきたことに鑑み、いずれは世界の山にも目を向け、さらには登山を通しての学術、芸術、文学等について学び、特色ある支部を目指したいと思います。

“より楽しいより豊かなJACクラブライフ”は、支部会員皆さまのご協力無くしては実現不可能です。支部の行事に参加

いただき、さらには支部の運営、行事企画 にぜひ率直なご意見をお寄せください。

ビール工場見学・ビール園懇親会

期 日：2007年8月11日（土）

場 所：サッポロビール千葉工場（船橋市高瀬町）

幹 事：平井喜久枝、豊倉さと子

参加者：26名（男性23名、女性3名）

平山善吉、小疇尚、阿部慎二、後藤三男、櫻田直克、行方正幸、遠藤宗男、柿崎謙介、佐藤明夫、岩尾富士夫、石村孝夫、結城純一、竹島正義、平井喜久枝、小坂橋志朗、山口文嗣、高田春男、柳下忠義、赤井一隆、篠崎仁、豊倉さと子、諏訪義春、永井わか子、吉永英明、波木正司、玉田眞一（ゲスト、JAC麗山会所属）（申し込み順）

千葉支部発足後、第一回目の記念すべき支部行事である。

ようやく梅雨が明け快晴、そしてうだるような猛暑で絶好のビール日和となった。津田沼駅南口千葉工業大正門前に12:10集合。サッポロビール千葉工場への循環無料シャトルバスは、電話での約束に反し中型バス（25名乗り）だったため始発の場所で満員となってしまう、京成津田沼駅から参加の会員は乗車できず、後発の大型バスに乗車となってしまった。遅れた参加者は、見学コース途中で合流することができた。13時から40分間、工場見学（原料がビールに変わるまでの工程）をした後、目の前に青い海が広がるビアホールで、出来立てのここでしか味わえないおいしい生ビール（黒ラベル&エビス）を20分間試飲した。その後、ビール園レストランへ移動し

懇親会となった。酒豪揃いに猛暑が輪を掛け、本日の割当て一人当たり中ジョッキ2杯では足りない状況で、下戸の数名から割当てを譲り受ける人も。

はじめて会う会員同士の会話も大いに弾み、所期の懇親の目的を達することができた。15時50分で懇親会終了、16時発のバスで帰途についた。

（平井喜久枝）



千葉支部主催 第2回行事 「鋸山・車力道コース」

期 日：2007年10月14日（日）日帰り

場 所：鋸山（329.5m）「千葉の里山を歩こうシリーズ!! 第1回目」

参加者：26名（男性20名、女性6名）

芳賀孝郎、小疇尚、後藤三男、櫻田直克、行方正幸、結城純一、竹島正義、山口文嗣、柳下忠義、赤井一隆、高橋正彦、三木雄三、藤原学、坂上光恵、諏訪吉春、篠崎仁
（以上会員16名）

行方夫人・同息女、石井建夫、坂本洋一、高尾市三、川上夫妻、鈴木正夫、北川洋子、白井さん（以上ゲスト10名）

幹事：諏訪吉春、篠崎仁

千葉支部の事業計画として、千葉県は県の最高峰（愛宕山408m）が日本一低い県ですが全国に先駆けて「里山条例」を制定した県であり、今後、支部会員で千葉の山を歩くことを計画しております。今回は、名付けて「千葉の里山を歩くシリーズ」として、第二回目の支部行事を千葉の名山である「鋸山」を、新しいコースの車力道コ

う準備運動を行い、少々曇り空の中、元気に出発。最年少は行方氏の美少女20歳から最年長は70歳代の健脚氏までの多士済々な面々で、歩行ペースが少し早かったのか、一行は長い列となり、沢蟹の群れる沢沿いのコースを右手に見ながら、登山道に到着。房州石の運搬に使われた軌道なる苔むした古道を往事を偲びながら各々のペースで黙々と登る。

「それにしても、昔の女性は丈夫なもので、この急な階段状の登りを、空の荷車とは言えこれを抱えて一日に三往復したとはとてもとても今は思えない」などど、感心しながら汗を拭き拭き石切り場跡に出る。この後、さらに急な階段を登り詰めて展望台にやっと到着。あいにくの曇り空でしたが、それでも、東京湾を眼下に見渡せる180度の大眺望に皆さん多いに満足し流した汗の苦労を想い、感激ひとしおの面持ち。正面にかの有名な地獄覗きの絶壁が見渡され、「また、あそこまで下り登り返すの」と鋸山を甘く考えていたゲストが独りつぶやく。ここからが日本山岳会員の皆さんの矜持で、一等三角点のある、今は殆どの登山者が登らない鋸山山頂を目指して往復25分のアルバイトをこなした。



ースのルートを辿り歩いてみました。

午前10時にJR内房線の浜金谷駅に参加者が集合、駅前にて簡単な自己紹介と軽

当初の予定時間を大幅に遅れたため、一人、画題を求めてロープウェイにて参加した。後藤画伯が心配し「百尺観音」前まで来て頂き、一同、恐縮しながら、昼食場所の地獄覗きの東屋にて大休憩。13時過ぎに、ぽつりぽつりと降り出した雨足に促されて、日本寺の「大仏広場」に向かって歩く。ここで、車にて参加した行方ご家族とお別れ。日本一の大仏様の前でJACの

旗を掲げて、参加者の記念写真を撮り、ゲストの一部の方は「ばんや」直営の運行バスで直行し、大半の方は40分をかけて、そぼふる小雨の中を、晩秋の房総の里山の風情を味わいながら、14時20分に無事に保田駅に到着した。ここで、解散とし、「ばんや」直行組と別れ、心地よい微かな疲れを感じながら車窓の人となりぬ。

(諏訪吉春)

歩くスキーの普及の経緯について

芳賀孝郎

1960年代日本のスキーが年間100万台以上も、アメリカ、カナダ、ヨーロッパに輸出されていた。ハガスキーは、年間10万台ものスキーを輸出して毎年輸出貢献企業として表彰された。スキー輸出の関係で、私はときどきヨーロッパに出かける機会があった。特に北欧で、私が見て心にのこったのは、冬の郊外で、昼はもちろんのこと夜のクロスカントリースキーを楽しんでいる人々であった。クロスカントリースキーは北欧では市民のスポーツとして人々に親しまれていた。私はいつか、このクロスカントリースキーを、日本のスキーのメッカ、札幌で普及させたいものと胸に秘めておいた。

1972年の札幌オリンピック終了後、私は中川信吾氏（元北海道歩くスキー協会会長）や、友人の今野吉博氏（現在歩くスキー協会会長）、そして札幌市教育委員会体育部の人々とクロスカントリーの普及について、時間を忘れ議論した。普及のためには、その呼び名がクロスカントリースキー、ラングラウフシーでは高度なスキー術の感じを人に与え、参加する人は少ないと予想した。一般のスキーヤーが気軽に参加する「ネーミング」が必要である、と話合った。そして決まったのが「歩くスキー」であった。歩くスキーとは、基本的には老若男女を問わず、誰も

が気楽にできることを主張しているものであった。この「歩くスキー」の名前は、よく定着して普及に役立ったので、名づけ親の私たち仲間は喜び、誇りに思ったものである。

当時、スキー製造をしていた私は、「歩くスキー」の普及によって、「歩くスキー」を大量に販売する計画を立てた。そのためには、今までのスキー学習はアルペンスキーであったので、これを「歩くスキー」に切り替えてもらいたく、札幌市教育委員会に何度もお願いに行った。私の熱心さに押された教育委員会は、私に札幌市の小、中学校の体育の先生方に「歩くスキー」の効用に付いて説明する機会を与えてくれた。「歩くスキー」はスキーの基本であり、「歩くスキー」をマスターすることにより、一般のアルペンスキーも、本格的なクロスカントリースキーも、ジャンプも早く上達することを話した。また、「歩くスキー」は、その日の雪の状態によって、スキーの滑走面に塗るワックスを選択しなければならないから、雪という天からの贈りものをよく知るためにも、とても良い。アルペンスキーと違って、雪の大自然をゆっくり走り、眺め、自然と親しむことができる。スピードを出しすぎて、怪我をすることもなく、体の中から熱い汗をかき、心身ともに清々しくなることを話した。

中川氏は法大スキー部OBで、全日本学生スキー大会の優勝者であった。「歩くスキー」のパイオニアとしてふさわしい血筋であるので、少し書き加えたいと思う。

1911年新潟県高田町で、オーストリア・ハンガリー王国の武官レルヒ少佐による日本最初のスキー講習会が開催された。その講習会に北海道からただ1人の参加者、三瓶中尉がいた。北海道の本格的なスキー技術は、同中尉から始まっている。北海道のスキーの草分け、札幌月寒25連隊、三瓶中尉の娘が中川信吾氏の夫人である。そのほか、「歩くスキー」の普及には多くのスキー関係者がボランティアとして活躍している。元オリンピック選手から、その他日本を代表する元スキー選手、スキー愛好家などが今日の「歩くス

キー」を普及させた。

札幌市内の小、中学校の多くは「歩くスキー」を授業に取り入れ、「歩くスキー」を楽しむようになった。私が学校の先生に約束してから五年の歳月を経て実現したのだった。来年、道民市民歩くスキー大会は、25回を迎える記念すべき大会になる。この大会こそが多く多くの市民で作上げたものであり、輪を広げていきたいものである。

最近、私は学生時代の山仲間と奥日光の光徳付近を年に1回の「歩くスキー」をして楽しんでいる。日光での「歩くスキー」の普及ぶりを見ながら、札幌の「歩くスキー」のことと、新しいことに取り組んだ時の難しさなどをいろいろ思い出している。

千葉支部2008年新年山行のお知らせ

千葉支部が設立されて初の新春を祝って、支部会員の皆様と千葉県の名山に登り、懇親会を楽しみませんか？千葉支部2008年新年山行を下記の通り計画いたしました。

一日だけの参加、夜の懇親会だけの参加も歓迎です。どうぞお誘いあわせの上、是非ご参加下さい。皆様のご参加をお待ちしております。

平成20年1月19日(土)、20日(日)の二日間の日程です。初日は御殿山に登り、岩井海岸の民宿治郎吉に泊ま

って、新鮮な海の幸を肴においしいお酒を酌み交わして親睦を深め、二日目には富山、伊予が岳の二山に登る一泊二日の計画です。

民宿治郎吉は岩井海岸の海辺にあり、千葉県山岳連盟推薦の宿です。施設は古いながら海鮮料理が美味しく、夕食の献立にイセエビと鮑が一人に一つずつ付くのが自慢の宿です。

(担当:本木・豊倉)

記

期 日： 1月19日(土)～20日(日)

集 合： JR外房線 岩井駅 1月19日(土) 10時～11時頃

※ 参加ご希望の方へ後日お知らせいたします

日 程： 1月19日(土) 岩井駅—(町営バス)—山田—御殿山—山田中—(町営バス)—治郎吉(泊) 新年懇親会

20日(日) 治郎吉—富山—伊予が岳—次郎吉
宿泊先： 南房総市富山町 民宿治郎吉 電話 0470-57-2047
宿泊費： 10,000円(一泊二食) 酒代は別途(持ち込み可)
持ち物： 昼食、飲み水、雨具、他 日帰り登山に必要なもの
申し込み： 本木總子宛にお願い致します。
※参加日、宿泊の有無、会員番号、氏名、住所、電話・FAX 番号をご記載下さい。
締め切り： 12月29日(土)

内浦山県民の森・清澄寺の自然を観察のお知らせ

千葉支部ならではの、いち早く春風を受けながら、房総の青い海原を一望し、日蓮上人ゆかりの名刹を訪れたりしながら、千葉の自然を観察する機会を計画いたしました。

今回は2日間にわたり森林インストラクターの望月力智氏にご案内いただくと共に、房総半島の自然についてもいろいろお話を伺う予定です。

この機会に我が故郷千葉の自然について学習し、千葉の自然の特徴を知ったり、見直したり、新たな発見をしたいと思えます。是非皆様お誘いの上ご参加下さいます様お待ちしております。(担当：川越、篠崎、豊倉)

記

日時： 2008年3月15日(土)～16日(日)
集合： 外房線「行川アイランド駅」前 13:00
日程： 15日(土) 行川アイランド駅(歩)～おせんころがし(房総の主稜が清澄山系から東に向かい太平洋へと落ちる断崖)(歩)～誕生寺(歩)～安房小湊駅(マイクロバス)～内浦山県民の森(自由散策)(森の宿せせらぎ泊)

※講義「房総半島の自然と植生」望月力智氏(森林インストラクター)

16日(日) 内浦山県民の森(歩)(関東ふれあいの道)～清澄寺(境内の散策)(自由解散)～安房天津駅

宿泊先： 内浦山県民の森内「森の宿せせらぎ」(04-7095-2821)

費用： 宿泊費等 9,000円

(交通費等は各自交通手段が異なりますのでこの中には含まれません)

募集： 30名(先着順)

申込締め切り： 2008年1月28日(月)迄

申込先： 豊倉さと子宛にお願いします

※参加日・宿泊の有無・会員番号・氏名・住所・電話・FAX 番号をご記入して下さい。

会員だより

● 後藤三男油絵展（安曇野と山岳画）

日時：2008年3月9日（日）～15日（土）

場所：東京交通会館B1F・ゴールドサロン（有楽町駅前）

● 講演会

日時：2008年3月11日（火）

18：30より

場所：日本山岳会（市ヶ谷）104号室

演題：『日本アルプスとカルパティア

山脈の山岳景観の比較』

講師：小疇 尚（こあぜたかし）

明治大学名誉教授

千葉支部会員

著作『山を読む（自然景観の読み方）』（岩波書店、2007）

『山に学ぶ一歩いて観て

考える山の自然』（古今書院、

2005）他多数

日本アルプスとカルパティア山脈は、ほぼ同じ高さで、ともにハイマツ帯があり、氷河地形が発達していますが氷河はない、など似た点が多く見られます。しかし氷河地形やハイマツ帯の規模は大変違います。両山地の山岳景観を比較しながら、その違いが生まれた原因を考えます。

申込先： 豊倉さと子

図書案内

●日本山岳会京都支部 編

『左千方登山事故調査報告』（日本山岳会京都支部発行、2007/9、非売品）

2006年9月2日、京都支部山行において痛恨の死亡事故が発生した。目的の山である左千方(センボウ、1,196.8m)は近江と美濃、両国の国境線上にある。例会山行として実施した日帰り山行において、参加者の一人が下山中に稜線から転落し生命を失った。

本書の構成は、第1章左千方登山計画、第2章事故報告（時間経過毎の記録）、第3章遭難事故の問題点そして第4章事故調査委員会の見解となっている。

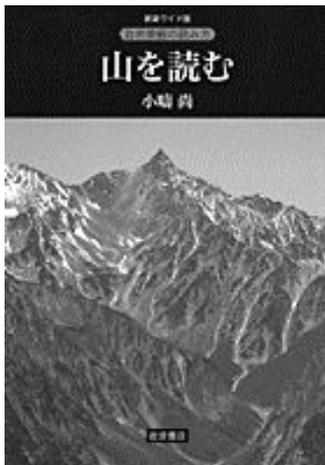
4章では、山行リーダーの留意点、反省点として①メンバーの健康状態の確認②目的・行程・行動予定の説明③体調不良者への配慮があげられ、この観点から事故の分析、原因究明が詳細かつ率直に次の通り記

述されている。①について、遭難者のAさんは、山歴の豊富なベテランである。しかし、前々日に山陰の大山登山をしている上に慢性的な膝関節痛を抱えており、70歳の年齢を考えると疲労は回復していなかったのではないかと推測される。当日早朝5時出発も心身の負担になったと思われる。体調不良の上、沢登りで身体を濡らし、過酷な藪こぎをして一層の体力消耗をさせ、それが判断力・集中力を低下させ事故につながったと推測される。②について、山への取り付き段階で道を誤り最初から1時間という大きなロスがあった。林道が廃道となっていたことから谷筋を遡行することとなり、体力の消耗と時間のロスが大きかった。途中でコー

ス変更をしており、思ったより時間を費やし三国岳出発は17:54で日が暮れかけた。コース変更時点で撤退をするべきであった。

③について、参加者は60~70代で、翌朝の行動記録を見る限り、体力は消耗し尽くしていた。夜間の行動であり、交互にランプを照らしあい助け合わなければならなかったにもかかわらず、隊列は乱れ、Aさんに配慮する余裕が無かった。19:51夕食を摂り最後の下りへとスタート、岩のゴツゴツした急な道となる。

20:10事故発生、ドーン・ドーンという音とともにAさんが真っ暗闇の中に吸い込まれていった。



本書の帯に、“山が生まれた遙かな時に思いを馳せる”と記されている。著者の山に寄せる思いが伝わってくる。この本は、山の地形について、それをつくった自然の諸作用との関係という視点で、大変判りやすく書かれている。目次は、1山の国 2日本の山・世界の山 3川に刻まれる山 4雪国の山 5凍土の山 6氷河野山 7山のつきあい となっている。この新装版は、文字も大きて読みやすく各ページに掲載されている多くの写真はいずれも貴重

報告書を読んで最初に感じたのが、他人事ではないということであった。一つ間違えれば他の山行でも起こりうる事故であると思った。

塚本京都支部長は、「刊行のことば」で、このような事故を二度と繰り返さないために、「前車の轍を踏まないための細心の注意を自然のなかでは持ち続け」なければいけないことを記している。本書はそのために、極めて率直に、厳しい目で事故を見つめ見解を表明している。

発足したばかりの千葉支部がこれから会山行を行っていくにあたり、本書は貴重な教訓を示してくれている。支部委員をはじめ多くの会員に読んでもらいたいと考えている。

●小嶋尚著『山を読む』新装ワイド版 自然景観の読み方シリーズ(岩波書店、2007/5)

著者小嶋尚氏は、明治大学名誉教授、専門は自然地理学、地形学。JAC 千葉支部会員。

日本の山地のほかヒマラヤ、アンデス、スピッツベルゲン、カルパティア山脈などで研究。

なもので、これを見ているだけでも山への思いがふくらんでくる。

著者は、「この本を読み、自然の成り立ちに関心を持って山を見、山に登れば楽しみはさらに大きくなると思います。」と書かれている。

来年3月11日(火)18:30~20:00、JAC ルームで小嶋先生の講演会を開催します。演題は、『日本アルプスとカルパティア山脈の山岳景観の比較』

本書を一読して講演会に出席されると一段　と理解が深まることと思います。